

伊那市内の学校の様子や地域の皆さんとのつながり、講演会のお話などを紹介します。

伊那市よりよい教育環境推進連絡会

広報紙

# えかあ

令和8年度

No.2

7月 7日



バックナンバー

今号の話題

- ▶ 春富中学校 キャリア教育講演会 … 「先輩」による“道草”の話
- ▶ 伊那市人権同和教育研修会 … 多様なルーツをもつ人たちとの共生に向けて…
- ・ 伊那市人権同和教育講演会のお知らせ
- ▶ 長谷中学校 … 施設や地域の方々と楽しく交流しよう
- ▶ 長谷公民館 人権講座 … すぐ身近にあった「戦争」

## 春富中学校 キャリア教育講演会… 「先輩」による“道草”の話

5月15日(金)、春富中学校で、同校同窓会主催のキャリア教育講演会が行われました。講師の佐野天咲(さの あさき)さんは、慶應義塾大学総合政策学部の学生さんですが、春富中学校の卒業生でもあります。在校生の「先輩」にあたる佐野さんから、「道草をすること」について話を聴きました。

佐野さんは、昨年度一年間大学を休学され、伊那市西春近に古民家を改修したカフェ「Sekai no Monogatari (せかいのものがたり)」をオープンされました。講演の中でもお話がありましたが、佐野さんはそれまでも、キャリアフェスティバルの副実行委員長や、商店街でさまざまな人が集える場『いなまち たしゅう室』の管理人になったり、子どもの居場所『UT パレット』を立ち上げたりなど、中学・高校時代も含めて様々なチャレンジをされてきました。ご自身のことを「たくさん道草をしてきた人」と表現されていました。



そう、今回の講演のテーマは「道草」でした。「道草」に抱くイメージは人それぞれかもしれませんが、佐野さんが言われる「道草」には必須のものがああります。それは「ときめき」です。自分自身の心がときめくことへのチャレンジを大切にされていることが伝わってきました。生徒たちは、佐野さんが準備されたワークシートに、自分がこれからやってみたい「道草」を楽しそうに記入していました。佐野さんは、「自由には責任が伴いますよ」という話もされていました。自分が楽しいと感じることを勝手にやっていけばよい、ということではないのですね。

これから様々なチャレンジができる中学生。自分がやってみたいことを自分自身の心に改めて問いかけてみる、そんな機会になったのではないのでしょうか。

## 第1回 伊那市人権同和教育研修会… 多様なルーツをもつ人たちとの共生に向けて…

6月2日(火)、伊那市役所多目的ホールを会場に、第1回伊那市人権同和教育研修会が開催されました。講師は、伊那市集落支援員で多文化共生推進コーディネーターの宮ヶ迫ナンシー理沙さん。バックグラウンドであるご自身の生い立ちを基に、多様なルーツをもつ人々と共に生きる地域・学校づくりに向けて私たちが何を大切にしていけばよいのかを伝えてくださいました。市内各小中学校の推進委員の先生方、伊那市人権同和教育推進協議会の方々、伊那市関係各課の方々が耳を傾け、講演後にはグループ協議を行いました。

宮ヶ迫さんのお話は豊かで力強いものでした。その全てをこの紙面に再現することは非常に難しいことです。大切だと思われる点をいくつか記してみたいと思います。

○「**多文化共生**」とは、完成された状態を指すのではなく、変化し続ける社会の中で、立場や背景の異なる人たちが**対話を重ね、関係を築いていく「終わりのないプロセス」**そのものであること。「みんな違ってみんないい」というスローガンのような容認に留まるのではなく、違いによって生じる困難や生きづらさ、社会構造的な力関係（マジョリティの特権）に目を向ける必要があること。

○ややもすると、外国人を「いずれ帰る労働力」と（のみ）捉えることも起こりがちだが、実際には家族を形成する人たちもいて、地域に暮らす「**生活者**」でもあるということ。言葉の習得は個人の努力の問題に還元されがちだが、習得にはその人が置かれた労働環境、学ぶ機会の有無といった社会環境が大きく影響するということ。支援においては、個人の努力だけでなく、「**社会の側の条件**」を改善する視点が不可欠であること。

○多様性を尊重する社会の実現には、全員に同じ対応をする「**平等**」ではなく、**それぞれの障壁や格差に応じた支援を行う「公正（エクイティ）」**が必要であること。特に教育分野では、日本語指導の有無だけでなく、将来の選択肢を広げるための進路保障や、ルーツ・アイデンティティに対する配慮が、すべての子どもの成長に求められていること。 等

外国にルーツをもつ方と実際に関わりがあるかどうかなど、該当する状況が身近にないと実感しづらい面もあるかもしれませんが、ですが、宮ヶ迫さんの言葉にあったように「日本は既に多様な人たちによって彩られている社会」になっていると思います。そして、私たちが暮らすこの伊那市もその例外ではないように思われます。

- ・相手の方の事情や背景を知ろうとすること、生きづらさがないか想像してみる
- ・自分が無意識のうちにもっている「これが当たり前（普通）だ」という感覚を問い直してみる
- ・言葉や制度の壁など、困難を抱えている人に対して、応援する人になってみる

これらのことは、外国人の方々だけでなく、困難や生きづらさを抱えている他の人たちに対しても言えることのように思われます。対話を積み重ねていくことの大切さは、今まさに世界で問われていることなのかもしれません。



お知らせ

多文化共生に関わって、伊那市では、下記の講演会の開催を予定しています。

### 伊那市人権同和教育講演会（市民大学・保育協会との共催で行います）

日 時： 令和9年1月16日（土）午前10時～11時30分

会 場： いなっせ6階 ニシザフいなっせホール

講 師： 星野 ルネさん（漫画家・タレント）

演 題： 「アフリカ少年が日本で育った結果」（仮）

アフリカンな外見と日本育ちの  
中身とのギャップを自らの強み  
として活躍中の星野ルネさん。  
ぜひ会場にお越しください。

## 長谷中学校 施設や地域の方々と楽しく交流しよう

6月23日（火）、長谷中学校全校生徒の皆さんによるふれあい訪問が行われました。訪れたのは、地域の福祉施設であるサンハート美和。「はじめの会」では、生徒会長さんの挨拶の後、音楽部や全校生徒の皆さんによる歌や、3年生の皆さんによる太鼓演奏が披露されました。その後は、サンハート美和と、隣接する交流施設・聚楽（しゅうらく）館の2会場に分かれ、折り紙や百人一首、ボッチャ、そして、会話を楽しみました。

「はじめの会」が行われた交流スペースには、40名を超える入居者の皆さんに加え、地域の方々もお見えになっていました。生徒会長さんが「全員で楽しみましょう」と挨拶をし、施設の方からは「皆さんの元気で明るい姿に入居者の皆さんも元気が出ます」とお話がありました。

音楽部の皆さんによる『赤とんぼ』では一緒に口ずさむ姿が見られたり、全校生徒が加わった地元につながる歌『さんざ節』には「とてもよかった」の声が寄せられていました。3年生の皆さんによる南アルプス太鼓の迫力ある演奏に聴き入って（見入って）おられる様子も印象的でした。



後半の時間、サンハート美和の各部屋では折り紙などで交流をしていました。入居者の方が困っていると、生徒さんが「（この部分は私が代わりに） やっていいですか？」と優しく声をかけ、それに対して「ありがとね」と応えておられました。

聚楽館では「トーキングボッチャ」が行われていました。通常のボッチャと違ったのは、自分の番の投球を終えた人がカードを引き、そこに書かれているお題に答える場面が設けられていたことです（だから、「トーキング…」なのですね）。「みそ汁に入りたい具は何ですか？」「名前を大きな声で言ってください」等のお題がありました。「生年月日を教えてください」というお題には、地域の方が「月日だけでもいい？」とリクエスト（？）され、生徒さんたちがOKを出していました。思わず笑顔になってしまう場面でした。



この活動は、「生徒たちが地域社会の一員としての自覚をもち（中略）地域に元気を届けることを目的として」いるそうです（プレスリリースより）。「元気を届けよう」と願った中学生の皆さんも、この活動を行うことで元気になっていたのかもしれないね。お互いの笑顔が見られたふれあい訪問でした。

## 長谷公民館 人権講座… すぐ身近にあった「戦争」

5月26日(火)、長谷公民館で第1回入野谷講座として人権同和教育講座が開催されました。講師は、伊那市誌編さん室学芸員の濱 慎一さんです。大きく二つの事柄についてお話していただきました。一つは『激戦から帰ってきた長谷杉島の特攻隊員』、もう一つは『ある一家の十五年戦争一日中戦争から戦後まで、壮絶な戦いの記憶ー』です。後者は、昨年の10月から今年の3月まで伊那市創造館において企画展が開催されていました。「その内容をぜひ入野谷講座で」ということで、今回の講座が実現する運びとなったそうです。



一つ目のお話の「長谷杉島の特攻隊員」は、伊東武治（いとう たけはる）さんという方でした。上伊那農業学校（現在の上伊那農業高等学校）を卒業後、東京高等農学校（現在の東京農業大学）に進学されましたが、20歳で陸軍に入隊し、その後、飛行兵となりました。23歳の時、航空特攻隊員として出撃しましたが、天候不良のために帰還。その後は出撃がなく

終戦を迎えられたとのこと。戦後は役場にお勤めになり、農業にも従事されたそうです。

同じ部隊に配属され、訓練を受けた飛行学校も同じであった浅川又之（あさかわ またゆき）さんという方がおられたそうです。伊東さんが「無二の戦友」と語られる浅川さんは、知覧から出撃され、帰らぬ人となりました。資料として伊東さんの手記をいただきました。後に伊東さんが知覧特攻平和会館を訪れ、浅川さんと「再会」する様子が記されていました。大変胸を打たれました。

二つ目のお話の「ある一家」とは、講師である濱さんのお祖父様一家のことです。

今から7年前、家の古い蔵を壊すことになり、中の物を片付けることになったそうです。するとその中に、お祖父様たちご一家が戦時中どんな状況にあったのかかわかる2000点もの資料があったのだそうです。濱さんが、日記や手紙、はがき、写真、書類といった膨大な資料を整理する中で分かったことは、お祖父様のお兄様が海軍での日々を送り、最後は戦艦「武蔵」に乗艦して戦死されたこと、看護婦（当時）として働いていたお祖父様のお姉様は満州に渡り、そこで亡くなられたこと、濱さんのお祖父様は衛生兵として靴、シベリア抑留を経て帰国された（お祖父様が帰国されなければ濱さんはこの世にはいなかった！）こと、等々でした。

濱さんはおっしゃいます。「会ったこともない祖父の兄、姉がとても身近な存在に感じた」と。身近なところで十五年戦争は行われていたのです。

濱さんは、「記憶を記録として残していくこと、次の世代に継承していくことの大切さ」も話されていました。

伊那市創造館では今、この夏以降、収蔵庫棟内に開設する「伊那戦争資料展示室」の準備を進めているそうです。皆様もぜひ足をお運びください。

